

白井晟一は孤高ではなかった。向井寛三郎教授と過ごした欧州生活 ～ 会誌の行間に秘められた同窓会の意義

白井晟一研究会主宰 石沢 加津子

(意匠工芸学科 昭和51年卒)

愈々「京都工芸繊維大学同窓会誌」の初号である。新たな学部編成に伴い、「京都工大会誌 No.108」平成13に掲載させて頂いた拙文が現実となり、2学部が統合されて同窓会も1つに纏まる動向となったことは、まさに青天の霹靂でもあるが、しかしまた必然的な時代の要請とも思える。私達だけが、このような動揺と戸惑いをするのかと鑑みれば、「京都工大会」の前身「京都高工會」の会員方々も、その時そういう思いをされたのではなからうか。

その「京都高工會」會報を繙くと、当時の図案科教官、本野精吾教授や「老青年」のペンネームで寄稿や編集もされた向井寛三郎教授の、興味津々たる欧州旅行や留学の様子が窺える。が、当時卒業後すぐドイツ留学を果たした白井晟一(図・昭和3卒・「京都工大会会誌 No.110」参照)の名前はどこにもない。学生時代から私は「ドイツで京都高等工芸の教官に会われなかったのでしょうか？」という疑問を抱いていたが、ご子息の向井正也先生は、一息間をおかれてから率直に答えてくださった。「帰国後真っ先に会いに来られるべきは、父の所にでしょう。」と。そして、「滞欧日記」の抜粋を拝見すると、「昭6(1931)10/19 ベルリン着 白井晟一氏出迎え。なつかしくうれしかった。」とあり、下宿の紹介やドイツ語が堪能で「白井君にはずい分色々世話になって」毎日のように食事も共にしておられたのだが、翌年2月3日に友人のためにと頼まれて「彼の顔を立てて、300マルク貸してやる。」とある。2ヶ月分の授業料が80マルクの時代である。向井寛三郎教授(図・明治44卒・昭27工芸学部長)は工科大学だけで

なく、ライマンシューレ(Reimann Schule・有名私立工芸学校)に通った僅少の日本人で、著書「図案学」「現代図案教範」等や論文「工芸の新解釈」でも有名。一方、政情危うい中を何とか帰国でき、一廉の者になって再会しようと思われたであろうが、本野教授62歳、向井教授69歳で生を閉じられたことも不運であった。

1970年、大阪万博の年に、東京・江古田に新築された自邸「虚白庵」は本野教授に倣ってか、洋室のコンクリートの家であるが、自らカメラマンに披露された自室に飾られた自作の書は、縦書の「妙法」の軸装であった。「妙法」といえば、それが松ヶ崎の象徴であることは、私達にはすぐわかる。学生時代は吉田校舎であっても、松ヶ崎に移った後の母校を恩師を偲びながら見に来られ、そこで目の当たりにされたのは、母校の発展とそれを見守る清々しい「妙法」であったに違いない。その山々を脳裏に描き、日々自室で仰ぎ見ながら、唯一の一瞥で今更に恩師の恩情を崇めて休まれたに違いない。

そして、最初にして最後となった念願の京都での建築「雲伴居」も、五山の送り火の一つが間近に見える所にある。親類縁者はなくなっても、故郷京都に自分の霊は必ず帰って来よう、そして、送り火を拝む人たちに送って欲しいという切なる願いであったのだろう。ご心情掬するに余りありて、とめどなく涙が頬を伝う。

日本芸術院賞に輝いた、九州の親和銀行本店コンピューター棟「懐香館」を、京都の美術商が恥ずかしげもなくそっくり模して祇園石段下に建てた時、京都で騒ぎ立てる人もなく、東京の美術評論家が唯一、「アトリエ」679号に掲載されただけなのも哀しい。その時、私達はどのようにして何もしなかったのか……

私の生家の門からは、真東に如意ヶ岳の大文字が見え、朝に夕に拝んで育った。今、同窓会のお世話をするようになってからは、8月16日には松ヶ崎に行き、多くの先輩方の面影を浮べながら、「妙法」の送り火に手を合わせている。

常に前向きに、明るさとユーモアを忘れずに、精神性の高い、ロマン溢れる生きざままで、私達後輩に偉大な示唆を与えてくださったことを、大いなる誇りと思っている。



本野精吾 教授
(本野博子様 提供)



向井寛三郎 教授
アルバム(中村映弥氏 提供)より



学生時代の
白井晟一
【初公開】

[本文中の掲載写真の転載禁止]